

# 歌手が 異世界 したら戦えた件。



歌い手が異世界転生したら戦えた件。

主人公 youth 瑠生 wolf 猫葉涼羽 真境名ニワロウ 羽州野狐

愚螺 巫杏 花坂みとら Nino 雷鳴

サークル縁会

## 第一章一再召喚——歌が呼ばれた日

その日は、ごく普通の日だった。

誰かは、新しい曲の話をしていた。

誰かは、次に何を歌おうか考えていた。

誰かは、今日の配信のことを考えていた。

共通していたのは、ひとつ。

——みんな、歌い手だった。

剣を振れるわけでもない。

魔法が使えるわけでもない。

ただ、歌うのが好きで。

歌い続けていただけの人間。

その瞬間までは。

世界が、ひっくり返る。

床が消える。音が歪む。色が溶ける。

気がついた時、そこは知らない場所だった。

(静寂)

古い本の匂い。石の床。高い天井。

誰かの息遣いだけが、やけに大きく聞こえる。

敵(低い声)

「……来た……」

影が、動く。

黒い塊のような存在が、ゆっくりと近づいてくる。

敵「……こわれた……」

「……いたい……」



意味は、わからない。

だが、

**危険だ**ということだけは分かる。

逃げようとする。足が、動かない。

そのとき。誰かの喉から、震えた声が漏れる。

——歌。

意識したわけじゃない。考えたわけでもない。ただ、

**怖**かったから、**歌**った。

旋律が、空気を震わせる。すると——

敵（苦しそうに）「……あ……」

黒い影が、揺らぐ。

歌が、触れている。

この世界は、歌に、反応している。

影は、完全には消えていない。だが、さつきよりも、小さい。そこへ、別の声が響く。

???? (老人風) 「ふおっふおっふお……やはり、来たかの」杖をついた老人が現れる。

老人「安心せい。ワシは敵ではない」

老人は、ゆっくりと語る。

老人「この世界は、“物語”でできてる」

「そして、物語は、人の感情で息をしておる」

「じゃが今、その感情が溢れすぎ、行き場を失っておるのじゃ」

「溢れた感情は、そのままでは留まれぬ」

「凍り、濁り、混ざり、縛り、様々な歪んだ形を取って現れておる」



「剣や魔法では、それには触れられん」

「じゃが、そなたらの歌なら、届く」

「感情を壊さず、歌で整える者——」

「人々は、そなたらを詩歌（シイカー）と呼ぶ」

ざわめきが走る。

老人「この世界は、かつても一度、歌を呼んだ」

「そして今——再び、歌を呼んだのじゃ」

沈黙。

老人「帰りたいじゃろう」

「ならば、壊れた物語を修復せい」

「それが、元の世界へ戻る条件じゃ」

選択肢は、ない。やるしかない。

詩歌たちは、顔を見合わせる。

震えている。だが——歌える。

なら。進むしかない。こうして歌い手たちは、

異世界で“戦う”ことになった。

剣ではなく。

歌で。

---

### 🔥 第2章 一炎の章——凍りついた心

詩歌たちが辿り着いたのは、白く凍りついた世界だった。

空気は重く、息をするだけで胸が痛む。

地面は凍り、建物は白く覆われ、音すら吸い込まれていく。

人の姿はある。

だが——誰も、動かない。

目は開いている。

だが、そこには何も映っていない。

敵（かすれた声）

「……感じなければ……いい……」

語りその声は、静かだった。

怒りも、悲しみも、ない。

ただ——止まっている。

敵「……痛くない……」

「……苦しくない……」

語りそれは、救いのようにも聞こえた。

だが、同時に——何も、ない。

心を止めることで、壊れないようにした。

それは逃げではない。

それは——生きるための選択だった。

詩歌は理解する。

これは“敵”というより、傷ついた心が固まってしまった形なのだ。

敵「……あたたかいものは……こわい……」

語り温もりは、思い出させる。

痛みを。喪失を。失ったものを。

だから、止めた。すべてを。

詩歌は迷う。

これは、壊していいものなのか。

だが——止まったままでは、“生きている”とは言えない。

必要なのは、優しさだけじゃない。

包むだけでも、足りない。

必要なのは——熱。

震えるような熱。

思い出してしまふ熱。

もう一度、心を動かしてしまふ熱。

詩歌は、息を吸う。

そして——歌う。

語り最初は、何も変わらなかった。

凍った空気。止まった時間。

歌は、ただ響いているだけのように見える。

だが——ほんのわずかに。

氷の奥で、何かが揺れる。

閉じ込められていたものが、微かに動く。

凍りついていた呼吸が、戻る。

敵（小さく）「……………」

語り声にならない声。

敵「……………あたたかい……………」

語りそれは、外から与えられたものじゃない。

内側から、思い出したもの。

敵「……………まだ……………感じていいのか……………」

語りその問いに、詩歌は答えない。

ただ、そこにいる。

ただ、歌った。

それだけでいいと、知っているから。

氷が、ひび割れる。

ゆっくりと。確かに。

完全には溶けない。

すべては戻らない。

だが——止まっていたものが、動き出す。

世界に、温度が戻る。

それは、燃え上がる炎じゃない。

生きている証の熱。

語り詩歌は知る。

心は、止めることもできる。

だが——もう一度、動かすこともできる。

そして、そのきっかけは、ほんの小さな、ひとつの歌でいい。

彼らはここで、痛みを思い出すことを怖れすぎなくていいと知る。



## ◆ 第3章 一水の章——溢れすぎた感情

語り詩歌たちが辿り着いたのは、水に沈みかけた街だった。

建物の半分は水に浸かり、足元には絶えず波紋が広がっている。

雨は降っていない。

それでも水は増え続けている。

静かに、ゆっくりと、逃げ場を奪うように。

水の中には、人の姿がある。

だが、立っているだけで動かない。

沈むことも、逃げることもできず、ただそこに留まり続けている。

敵（かすれた声）「……とまらない……」

語り声は震えている。

だが、その震えすら、もう抑えきれしていない。

敵「……………あのとき……………こうすれば……………」

「……………なんで……………あのとき……………」

語り繰り返される言葉。終わらない思考。止まらない後悔。

それは、水と同じだった。

一度溢れたものは、止めようとしても止まらない。

この水は、涙。

流せなかった感情。押し込めてきた記憶。

抱えすぎたものが、形を持って溢れている。

敵「……………ながしたら……………なくなる……………」

「……………なくなったら……………こわい……………」

語り流せば、失う気がする。

忘れてしまう気がする。

だから、抱え続けた。だから、溢れた。

詩歌は理解する。

これは壊れているのではない。

止められなかった心の形。

必要なのは、止めることではない。

押さえつけることでもない。

必要なのは——流すこと。

流れてもいいと、許すこと。

詩歌は、息を整える。

揺れる水面の中で、確かに立つ。

そして、歌う。

語りすぐには変わらなかった。

水はそこにあり、街は沈み、声は止まらなままだった。  
だが、わずかに変化が生まれる。

波紋の形が変わり、水の流れに方向が生まれる。  
溜まり続けていた水が、少しずつ動き出す。

留まる水から、流れていく水へ。

敵（小さく）「……ながれて……いいのか……」

語りその問いに答えはない。

ただ、否定もされない。

歌は押し流さない。消し去らない。

ただ、寄り添いながら背中を押す。

抱えていたものが、少しずつ手から離れていく。

無理やりではなく、自然に。

敵「……まだ……ここに……ある……」

語り流しても、消えない。

忘れても、なくならない。

だが、それでもいい。

抱え続けることだけが、守ることじゃない。

流れることで、前に進める。

水位が下がる。

ゆっくりと、確かに。

沈んでいた街の輪郭が、少しずつ姿を取り戻す。

語り詩歌は知る。

感情は、止めるものではない。

流れることで、生きていくものだ。

そして、流しても失われないものがあると知る。

(静かに暗転)

---



## ◎ 第4章 一混在の章——壊れた世界

語り詩歌たちが辿り着いた場所は、今までのどこよりも異質だった。

空が歪み、地面が揺れ、遠くの景色が何重にも重なって見える。

上と下の感覚が曖昧になり、歩いているのか落ちているのかすら分からない。

時間も、場所も、感情も、すべてが混ざっている。

笑っている声と、泣いている声が同時に響く。

喜びと絶望が同じ場所に存在し、何が正しいのか分からない。

敵（重なった声）「……わからない……」

「……どれが……ほんとう……」

語りその声は一つではない。

いくつもの感情が重なり、ひとつの存在になっている。

敵「……かなしい……うれしい……くるしい……たのしい……」

語りどれも本場で、どれも嘘のようだった。

これまで出会ってきた歪みは、ひとつの感情が強く固定されたものだった。

だが、ここにあるのは違う。

整理できなくなった心そのもの。

詩歌は戸惑う。

何を癒せばいいのか、どこに触ればいいのか分からない。

だが、それでも理解する。

人の心は、ひとつじゃない。

矛盾しているいい。混ざっているいい。

必要なのは、正しく分けることじゃない。

ほどくこと。

絡まった糸のように、少しずつ。

詩歌は息を合わせる。

揺れる世界の中で、立ち位置を確かめる。

そして、歌う。

語りすぐには変わらなかった。

世界は歪んだまま、音も景色も混ざり続けている。

だが、わずかに変化が生まれる。

重なっていた声が、少しずつ分かれ始める。

笑い声と泣き声が、別々に聞こえるようになる。

敵（小さく）「……………これ……………は……………」

語りひとつだったものが、複数に戻る。

混ざりすぎていた感情が、それぞれの形を取り戻していく。

正しくなくていい。綺麗じゃなくていい。

それでも、自分のものとして持てる形に戻っていく。

敵「……わたし……は……」

語り声に、輪郭が生まれる。

存在が、曖昧な塊から個へと戻っていく。

歪んでいた世界が、少しずつ整っていく。

完璧ではない。

だが、確かに“現実”として立ち上がる。

語り詩歌は知る。

心は、ひとつにまとまらなくていい。

混ざること、揺れることも、そのままでもいい。

大切なのは、それを抱えたまま生きていけること。

そして、矛盾したままでも人は立てるのだと知る。

世界は、完全には戻らない。

だが、立てる場所ができる。詩歌たちは、次の場所へと歩き出す。



♥ 第5章 一愛の章——離せなかった手

(静かな鼓動音／わずかなノイズ)

語り詩歌たちが辿り着いたのは、これまでのどの場所とも違う、不思議な静けさに包まれた街だった。

壊れてはいない。荒れてもいない。人の姿もある。

だが——どこか、息苦しい。

人々は笑っている。

優しく手を取り合い、離れないように支え合っている。

だが、その手は強く握られすぎている。

離さないために。失わないために。

敵(震える声)「……いなくならないで……」

語りその声は、優しかった。

誰かを想う、まっすぐな声だった。

敵「……ずっと……ここにいて……」

「……どこにも……いかないで……」

語り拒絶ではない。攻撃でもない。

ただ——手放せない。

それは、愛だった。

だが同時に、縛るものでもあった。

街の空気が重い理由が、そこにあった。

誰も離れない。誰も失わない。

だが——誰も、自由じゃない。

敵「……だって……なくなったら……」

「……もう……もどらない……」

語り失うことを知ってしまった心。

だからこそ、握り続ける。

壊れてもいいから、離さない。

詩歌は理解する。

これは歪みではない。

強すぎた想いの形。

守りたかった。

ただ、それだけだった。

詩歌は迷う。

この想いを、壊していいのか。

だが——このままでは、前に進めない。

離れないことは、救いじゃない。

止まることは、生きることじゃない。

必要なのは、奪うことでも、否定することでもない。  
信じること。

離れても、繋がっていられると。

詩歌は、息を整える。

重い空気の中で、一歩踏み出す。

そして、歌う。

語りすぐには変わらなかった。

握られた手はそのまま。

距離も、空気も、変わらない。

だが、わずかに変化が生まれる。

強く握られていた手の力が、少しだけ緩む。

敵（小さく）「……はなしたら……」

語りその言葉は、恐れだった。

敵「……なくなる……」

語り離すことは、終わりだと思っている。

だが、歌は違うことを伝えている。

離れても、消えないものがあること。

見えなくても、繋がっているものがあること。

それは、形じゃない。距離でもない。

想いそのもの。

敵「……しんじて……いいのか……」

語りその問いに、答えはない。

だが、否定もされない。

ただ、歌がそこにある。

それだけで、少しずつ変わっていく。

握っていた手が、ゆっくりとほどける。

完全には離れない。

だが——無理に繋ぎ止めることもなくなる。

空気が軽くなる。

息が、しやすくなる。

街に、初めて“余白”が生まれる。

語り詩歌は知る。

愛は、強ければいいものじゃない。

近ければいいものでもない。

支えるもの。

信じるもの。

それが、本来の形。

失うことを恐れて、止まるより。

離れても、前に進めること。

それこそが、生きること。

そして、離れても繋がれるものがあると知る。

詩歌たちは、静かにその場を後にする。

そして、最後の場所へ向かう。



## 第0章 終局——物語を手放す者

語り詩歌たちが辿り着いたのは、巨大な書庫だった。

天井は見えない。

壁一面に、無数の本。

ページが、ひとりでに、めくられている。

誰かが、ずっと整え続けている空間。

その奥からは、規則正しいはずの音に混じって、かすかなノイズが漏れている。

まるで、整いきらない何かが、さらに深い場所で息を潜めているように。

敵（落ち着いた声）「ようこそ」

語り本の山の奥、影が立っている。

敵「ここは、物語の管理室」

語りその一言で、すべてが繋がる。

敵「これまでの異変、すべて私が整えた」

語り“整えた”——その言葉に、違和感が残る。

敵「感情は、不安定だ」

「物語を壊す」

「世界を壊す」

語り敵は、本を一冊開く。

そこには、これまでの歪みが記録されている。

敵「だから私は、感情そのものを消したのではない」

「傷に、名前を与えた」

「揺らぎに、形を与えた」

「溢れたものを、そのまま世界に流し込ませないために」

語りここで、理解する。

今まで出会ってきたものは、誰かの感情から生まれた傷や偏りに、この存在が“固定された形”を与えたものだったのだ。

敵「私は、分けた」

「凍らせた心は、壊れないようにするため」

「溢れた感情は、流れを与えるため」

「混ざった想いは、整理するため」

「縛る愛は、失わないため」

(少し間)

敵「他にも、名を与え、留めた感情はあった」

「だが、それらもすべて同じだ」

「壊れないようにするための処置だった」

語りすべてに理由がある。

すべてに、正しさがある。

だからこそ、厄介だった。

敵「私は、間違っていない」

語り詩歌は、否定しない。

だが——それでも、違ふと知っている。

敵「間違いがあるから、争いが生まれる」

「揺らぐから、壊れる」

「歌は感情を動かす」

「だからこそ危険だ」

「だが同時に、歌ほど深く届くものもない」

「ならば、管理された歌だけがあればいい」

「整えられた感情だけがあればいい」

「そうすれば、世界は完璧になる」

語り沈黙。

詩歌は、答えない。

言葉ではなく——歌で、返す。

語り最初は、何も変わらなかった。

書庫は整然とし、世界は保たれている。

だが——ほんのわずかに、均衡が崩れる。

完璧だった世界に、“揺らぎ”が生まれる。

敵（戸惑い）「……なぜだ……」

語りその声に、初めて感情が宿る。

敵「私は……正しい……」

「……感情は……危険だ……」

語りだが、その声は震えている。

敵「管理しなければ……！」

「壊れるんだ……！」

語りそれは、怒りではない。

——恐怖。

壊れる世界を、一度見てしまった者の恐怖。

敵（小さく）「……こわいんだ……」

語り初めて、本音がこぼれる。

詩歌は、何も言わない。

ただ、そこにいる。

ただ、歌ってきた。

それだけでいいと、知っている。

書庫が、揺れる。

本が落ちる。

完璧だった世界が、初めて“呼吸”を始める。

その奥。

ずっとノイズを漏らしていた、さらに深い場所。

そこにあつたのは――

名前を持たない歪み。

感情が、行き場を失い、絡まり合った塊。

分けきれず、留めきれず、管理しきれず、

それでも消せなかったもの。

歪み

「……うるさい……」

「……うるさい……」

語り叫びではない。

——泣き声。

黒幕は、それを見つめる。

黒幕「……あの日も……同じだった……」

語り声が、震える。

黒幕「歌があった……」

「希望があった……」

「……だが……世界は……壊れた……」

語りかつて。

救おうとした。守ろうとした。

だが——感情は、溢れすぎた。

誰も受け止めきれなかった。

世界は、壊れた。

黒幕は、そのすべてを見ていた。

ひとりで。

黒幕「私は……歌を……信じていた……」

「だから……裏切られた……」

語り信じたからこそ、憎んだ。

信じたからこそ、縛った。

信じたからこそ、もう二度と揺らがないう世界を望んだ。

黒幕「もう……あんな光景を……二度と……」

語り歪みが、膨れ上がる。

詩歌は、何も持たない。

答えもない。

だが——ここまで来た。

歌ってきた。

痛みを思い出すことも。

流しても失わないことも。

矛盾したまま立てることも。

離れても繋がれることも。

その全部を、歌ってきた。

だから、今ここで返せるものがある。

語り歪みは、ほどける。

消えない。消さない。形を変えて、残る。

それでいい。それが、生きるということだった。

黒幕「……物語は……管理するものじゃ……なかった……」

「生きる……もの……だった……」

語り黒幕の身体は、光となり、書庫に溶けていく。

役割だけが、消えた。

存在は、消えなかった。

世界は、修復される。

完璧ではない。

だが——呼吸している。



## 🌙 エピローグ

詩歌たちは、帰路につく。

英雄としてではない。

ただの——歌い手として。

書庫の光がほどけ、世界の輪郭が遠のいていく。

足元の感覚が揺れ、次の瞬間、彼らはそれぞれの“日常”へと押し戻される。

そして、別の場所。現代。

誰かが、スマホで音楽を再生する。

誰かが、涙をこぼす。

誰かが、「歌ってみようかな」と呟く。

詩歌の力は、異世界だけのものではなかった。

歌は、世界を救うものじゃない。

生きる理由を、ほんの少し思い出させるものだ。

物語は、終わる。

だが——歌がある限り、物語は、続く。

——歌い手が異世界転生したら戦えた件。

第二幕、終演。



制作 縁会グループ

発行日 2026年 月 11日